第１１回フォーラムに寄せて

真インクルーシブ、教育システムの枠を超えて

日本重複障害教育研究会
会長　　星　茂行

本会がフォーラムという形式で「インクルーシブ教育」を世に問うてから１１年になる。そして本テーマ「共生社会実現のために今、何ができるか？」を取り上げてから５回目となる。問題提起を行い、オピニオンリーダーとしての役割を果たしてきたと自負している。

今回のテーマは、「共生社会実現のために今、何ができるか？Ⅴ」と題し、サブテーマを～真インクルーシブ、教育システムの枠を超えて～としてインクルーシブ教育を再び世に問うこととした。

インクルーシブ教育システムは、システムである。「共生社会をめざしたロケット」に例えることができる。ロケットのエンジン部分（推進役）が、特別支援教育という訳である。

そのロケットの目指す先（学校目標）は、共生社会。コントロールセンター（文部科学省・厚生労働省？）の指示に従いながら、座標軸を共生社会に定めて運航して行く。船長は校長。クルーはそれぞれの役割を担う教職員。乗客は子どもたち。船内で学んでいるのは、「交流及び共同学習」などである。共生社会に住むための準備学習が必要となる。

共生社会に着いたら、ロケットの外に出て、そこに住む準備をしなければならない（インクルーシブ教育システムの枠を超えてのことだ。）

ここに真インクルーシブ教育へのアプローチが必要となってくる。先ず考えられることは、通常教育の場である。真インクルーシブ教育の実現は、遥か彼方にあるのではなく身近にある。

それは、各学校の教育目標でもある。そこには、必ず知徳体の目標が含まれている。例えば、徳の面では、「みんななかよく」「思いやりの心」「支え合い」などの毎日の学習目標に含まれているではないか？さて、日々取り組み励んでいる目標と、現実社会とのギャップはないだろうか？実は大人の作り上げた既成社会に問題はないのか？わが身に置き換え追究してくことこそ、真インクルーシブへの身近なアプローチと考える。

18 歳を超えると成人としてみなされる子どもたち。住みやすい共生社会を作っていくのも、若者たちの社会参加の教育は不可欠である。「真インクルーシブ、教育システムの枠を超えて」というサブテーマを設けて、フォーラムを開催した理由は、ここにある。

第１１回フォーラム

[午前の部]　全体講演

テーマ「共生社会の実現のために今、何ができるのか？Ⅴ」
～真インクルーシブ、教育システムの枠を超えて～
講師　関西学院大学教授　眞城　知己

[午後の部]　パネルディスカッション

話題提供者：
- 眞城　知己（全体講演を受けて）　関西学院大学教授(教育関係)
- 五十嵐正人（もう一つの福祉という視点から）　ばおばぶ代表(福祉事業)
- 星　茂行（相談業務の視点から）　ほし発達支援オフィス所長（相談事業）

「共生社会実現のために今、何ができるか」という観点から、本フォーラムを進めていきたい。そして、真インクルーシブ社会に一歩でも近づけることを願っている。